



特別
~5
6074



特
八五
6074

子武より内

東山

57-2496



題は古烟

下

去れ歌

いふもは胡蝶のうらや急なる
無鋒のそは無枝の春もは

その花もふしあやうて

ふらふらあをきくしせう
年々明してこやけあめ

文章

三ノ
嘯風

五七
露草

伎師
若水



えんほららみほりぬれるは暑流

三つ牛久保
り名可

ゝ真つくりいゝあうて木の心あつさ敷

樹林

あまじしお帯と結めはりはな

松邑

色らうらとさまらぬら〜久涼

ゆすし市
一盃

りみまこみむり〜口はくま

水

長流り深き〜〜〜〜

観音の歌
卯月

ぬつぬりしきき足力と〜〜

源泉

帯り〜ははをほちり〜

月下

しとやのほはるり〜〜

鈴巻

そり信れあり〜

信あり

〜〜〜

伍長と
安水

〜〜〜

樹林

銀屏乃木と〜

雲枕

凡

〜〜〜

瓦葺

〜〜〜

樹林

世に雲は常河の世にふり
御舟

時節

霞色は舞のさくら小東垣
是也

夕とをいふと暮やしく母
其角

もや勝水はふしうらぐ
それか
肥後之モト
鬼ノ

夜久ゆめのみ夏はとくうこそ
鬼ノ

さしゆおのほかあゆらわぬを
白巻

村妻ハ一古忍れあめうら
松竹人

夜久げりうあつハ旅をせし
後也

と朝の群れめう忽れ目あし
幽影

ゆうかのの鹿ああううの毛
一砂

夕の暮やう秋の中てれる道
暮水

暮ららやうれてたひなを年の暮
早土

茶あれやみけ茶あらうして
柳を
を名あ

あまの鐘とあつこをうらな
初流

柑こちりてあまを備て
初流

輪りあつて難れもこほおの
 回系はし昂て此けて様めこい
 疑手や襦ろく障とつらふおほ
 おきしとこゆふこ紫めも
 ひとよやせぬは空電れあふて
 ち野の月とぬあふらうと
 ぬこふはあふりて来々
 松月
 こ湖
 紅葉
 紅葉
 紅葉
 紅葉
 紅葉

流るれもくほろり

流るる

まさこまゝ掛して飛ぶう形こそは
 樹人

百集

鬼村の中くまふゆらうのうら
 お鳥れあふてこもりあふれ
 冬風下ゆふりおとをさ
 櫻梅を流るるふれ美しむ
 水
 吾
 吾
 瓦瓶

雜

浴しつとこしつしつし
御りつとこしつしつし
縁れつとこしつしつし
ゆつしつとこしつしつし

しつ

しつしつとこしつしつし
あつしつとこしつしつし
しつしつとこしつしつし

浴しつとこしつしつし

真つしつとこしつしつし

仙化

しつしつとこしつしつし

よつしつとこしつしつし

せつしつとこしつしつし

根つしつとこしつしつし

海つしつとこしつしつし

かつしつとこしつしつし

想へりやと歌とあつらひの
 午れ大歌のさつこ今あは
 物子

はたしつとあつらひ
 念死

わらとつとあつらひをさつこや梅
 吾もつとあつらひをさつこや梅
 脚捨P. Eふ系めりつとあつらひをさつこ
 是子ゆとつとあつらひをさつこ
 此つとあつらひをさつこ
 秋よりつとあつらひをさつこ

葉ふけと花散と川のそと
くはえし—はほし散めくしと
我恵ハ指しせくんとせしをき
ふるよのちふとと清くしとよ
あまむつあまむつあまむつあ
こしとらふあまむつあ
共とれあえつふとらふあ
月とあまむつあむつあむつあ

物とほのちとまのちとあ
介—ああむつあ—あむつあ
どりのちとあむつあむつあ
とと平—あむつあむつあ
小宮—あむつあむつあ
をわ—あむつあむつあ
中とあむつあむつあ
鳥標子ゆうあてあむつあ

昔も流る流るるは相傳は年
也も心と心と心は合はる
際よとて心と心と心と心
と心と心と心と心と心と心
境地り流るるの流るる
日中と心と心と心と心
いふも心と心と心と心
後今と心と心と心と心
年

白川の流れは海に流るる
ありと心と心と心と心
母も心と心と心と心
まも心と心と心と心
心と心と心と心と心
心と心と心と心と心
心と心と心と心と心

人作るは平具也

梅

けさるもゆれと暮らうる也

流るもきくそて新樹はる水也

坂あつはけは是意ははる也

千もあきりり久もあま

白妙小僧歌をついけの氣也

くしりり鳥帽子あまははる也

平心して老也

海風の回するも奇也

梅

まゆや尻をむつをねじり

雨のたもあつてさよあよ

春れらふととと餅ふり合

と時どくは帯ははる也

あつたも人ゆもあつて月

しらんもあつたもあつて

梅

山

疎林や池亭に思ふ小舟 舟
暹配のるをとりふやゆり 負
同知おん心におの舟は難 山
己ま心こころふも蓮の如く 水
我思ふ大いお肩危をとり 負
命と此土す、般舟馬をす海 舟
火のこは流る此処と捉ゆる 水
数とてか——てはふみや寺 山

衣やうらうらと袖と福と舟の 舟
隙河とハハハハハハハハハ 負
おんをなげきといはれし水 水
このおんをハハハハハハハハ 舟
其まをこゝろまたのりとおの 山
とら——の池ては中あつ様 水
桐葉を曾れ物で池をす海 負
高半ハハハハハハハハハハ 山

花

山

舟て小庵をこゝあふりいこ
 と小舟をあわねは思ふ人
 撫つてふふふふふふふ
 上よ可いおとせうてい
 くらふあつあつあつあつ
 と舟の月ととも隠るまふ
 美の答れあふりいあつと
 舟 水 山 水 舟 水 山 水 舟

舟二日とてせうといしと色
 舟は腰あかまふふふふ
 くらふをりの食ふれ誰
 舟はくまてつとをふふ
 舟とてくたはれは連舟
 舟とてあつあつあつあつ
 舟 水 山 水 舟

舟

舟

湯島女おちせ東寺に

去姫のまえをやるゆゑは是なり

喜水

けししれ白をこぼすのすも

善女

姉を年より古くおぼえをいふ

松原

とるのけむいともいふこと

あ

ふれ月久きいおぼえをいふ

ぬ

大角豆伝うころから折ては法

あ

う
じ様ハコトヲ銀と云ハ
根命と云ハ情と云ハ
久敷殿ノ何と云ハ
主と云ハ列と云ハ
頃在りし時方ハ
醫者也ト云ハ
申すコトハ
高テの寺ノ
久

か分る雪の舟コトをあげ
舟と申すコトヤ
白代ノ世も
くしんを
云ふり候
又是戸
此ノこと
簫吹て
久

七

八

くまのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす

まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす
まのしりあしをきかす

あつち
也

傳中一巻の可也

おれ

梅より節々のはるもまゝの奉

ゆきやハ教ほよあ冷けれ戸 松屋

そりかつはまをたててそりし中

和永

大工カ一りも一十もれ

元抗

神唄の^ル^コ^リあまのこは月あわ

松屋

とほり舎といふ文之目あは

所

夏流の解てはての作のうら
 世々人常れちよんとわが
 ぬほる早小竹こあなうらぐせ
 木三ろまうけはは難や難
 海幸あとりりやは素絹のまこと
 谷の口まきく神心うすはり
 そとあト捨てきりしやまを向
 牡丹のく息と月としあく
 流 水 泉 石 流 氷 雪

火車遠くは死心と市いさあ
 舞してえと北の味頃てまご六
 尻つとさあまあさよは死のま
 柳は初りり傘のかけ落
 車に在り六十二敷いと衣あり
 餅より解きほほまの浮橋
 流士は火はちつやうつと境捨
 鷲よりまごうりやせすを
 流 水 泉 石 流 氷 雪

義を以て何事と云ふは
 あのとらぬ木の祖文の代り
 げ木に好澤と云ふは
 波を以て云ふは
 能因を以て云ふは
 如波を以て云ふは
 かつらりと云ふは
 女房に物おとすといふは
 水 孤 負 水 孤 負 水 孤 負 水

此十車に於て何事と云ふは
 椽と云ふは
 福蓋に云ふは
 こそ云ふは
 是れ云ふは
 あいむと云ふは
 水 孤 負 水 孤 負 水 孤 負 水

二二
 考

京都の他
老の
由
元

洛下書林井石同屋

天正

山路毒

梅り音

輪木

山

庵

母

